

「伝える」「彩る」「守る」を支える100年の強み

インキ事業

- 巣鴨工場で印刷インキ、ワニス、顔料生産
- 田端工場でグラビアインキ生産開始
- 合成樹脂型インキ(現在のオフセットインキ)生産開始



- 吉野原工場新設(グラビアインキ)
- 羽生工場新設



- 田端工場から羽生工場へ生産拠点集約化
- 吉野原工場でインクジェットインク生産開始
- 荒川塗料工業を買収



化成品事業

- プラスチック着色剤の開発により、化成品市場に参入

- 吉野原工場新設(マスターバッチ・コンパウンド)
- 大阪工場新設
- 土岐工場新設



- 土岐工場第2工場(クリーン工場)新設
- 東京インキ(タイ)設立
- 大阪工場第2工場新設



加工品事業

※ ネットロン® は三井化学株式会社の登録商標です。

- 吉野原工場でネットロン® の生産開始
プラスチック成形加工事業進出

- トーイン加工設立



- 防災／減災向け土木用樹脂加工製品開発
- ポリオレフィン軸延伸(MO)フィルム事業譲受



東京インキの誕生

1923年12月10日、同年に発生した関東大震災による復興需要を背景に、前身である合資会社日本油脂工業所を改組し、東京インキ株式会社が設立されました。創立当初は、巣鴨の本社・工場にて印刷インキ、ワニス、顔料の製造・販売を行っていました。その後、グラビアインキへの事業拡大や田端工場の新設を経て、設備や人員の増強を着実に進めました。1937年には、本社および印刷インキ製造部門を巣鴨から田端へ移転し、当時、東洋一の印刷インキ工場として評価されるまでに成長を遂げました。



事業領域の拡大

戦後、アメリカからプラスチック製品が輸入されるようになり、合成樹脂関連市場は急速に拡大しました。当社グループでは、合成樹脂型インキの開発を進める中で、印刷インキの製造技術を応用し、合成樹脂着色剤の製造に着手しました。1953年には、不飽和ポリエステル樹脂用のペーストカラーを、翌1954年にはポリエチレン用マスターバッチを開発しました(現在の化成品事業)。更に、事業の多角化を図るべく、1963年にはプラスチック成形加工事業へと進出しました(現在の加工品事業)。



海外生産体制の確立

1980年代、日本経済の安定成長を背景に、当社グループは生産拠点の拡充や米国現地法人の設立により順調に成長を続けました。しかし、1990年代のバブル崩壊以降は国内需要の鈍化が進み、成長のペースは緩やかなものとなりました。こうした環境変化を踏まえ、当社グループは主要3事業の再構築とともに、アジア圏への海外展開を推進しました。2010年に東京インキ(タイ)株式会社を設立し、当初はOEMによるマスターバッチ販売による事業基盤を構築しました。その後、需要拡大を受けて自社生産体制の構築を進め、2015年には当社初の海外生産拠点となるタイ工場を完成させました。こうした海外展開の深化により、生産と市場の両面での対応力を高め、現在の事業基盤の礎を築いています。



未来に向けた生産基盤の再構築 新工場の設立

当社グループでは、持続的成長に向けた生産基盤の再構築を進めています。これは、『「伝える」「彩る」「守る」ことで、豊かな未来を実現する』というパーパスのもと、より高品質で安定した価値提供を実現するための取り組みです。茨城県坂東市に新設予定の工場(2028年度中操業開始予定)では、生産能力の増強に加え、新事業展開にも対応可能な拡張性を備えた設備・レイアウトを導入します。また、自動化・省力化を推進することで、高効率かつ柔軟性の高い生産体制への転換を図り、既存事業の競争力強化と環境変化への迅速な対応を両立する事業基盤の確立につなげていきます。これらの取り組みを通じて、当社グループはパーパスの実現とともに、持続可能な社会への貢献を目指していきます。



新工場イメージ